

ヨブ記の読み方

サレプタ・ミニストリー

清野 隆二

目次

人類の苦しみと神	3
運命論か	5
ヨブという人	7
神とサタンの試み	8
さらなる試み	11
友人たちの訪問	14
ヨブの嘆き…自己否定	15
ヨブの嘆き…親否定	17
ヨブの苦しみ…因果応報	18
人類の究極的哲学	21
原因がわからないという苦悩	23
神の偏見か	25
迷宮入り	27
三人の友人の正体	31
ヨブの祈り	37
友人たちの批判の出どころ	38
神が災いを許したとは	41
恵みに乗ってしまったヨブ	42
神のお出まし	53
詩篇の記者の経験	57
二倍の祝福	61
お祈り	63

人類の苦しみと神

旧約聖書に「ヨブ記」という一つの書物があります。このヨブ記ほど、聖書の中で色々な物議をかもし出している書物は他にないと思います。

と言うのは、哲学においても文学においても、また人生論や倫理学においても、さまざまな方面において多大な影響を与えてきた書物だからです。

なぜ、この書物がこれほどまでに大きな影響を与えるかと言いますと、神と人との関係を真正面から扱っているからです。また、そこにサタンという存在が割って入りますから、神と、人と、サタン、すなわち善と人間と悪という構図になります。そこで何よりも人々に関心を持たせるのは、「人生の苦しみ」という問題がクローズアップされているからです。

本当に人間は苦しんできましたし、今も苦しんでいます。その時に、なぜこの苦しみがあるのか、神様がいるのだったら、なぜそれを解決しないのかと考えます。ところがヨブ記を見ますと、神様が苦しみを与え、許しているような矛盾ともみえる不可思議なことがおこっています。と同時に、この不可思議なことに何かがありそうだという予感もあります。人間はこれらの不可思議さを考えながら生きています。

人生の苦しみは、どこから来るのか。神が与えるのか、人間の罪なのか、それとも登場してくるサタンの働きなのか。しかも、そのサタンを許したのは神様だから、つきつめると神

様が人間に苦しみを与えているのか、などと考えさせるところが多い書物です。

そして、このヨブ記のもう一つの特徴は、「義人ヨブ」、要するに正しい人（ヨブ）が苦しみを受けたというところに、さらなる深みが出てきます。

でたらめな生活をしている私や、あるいは普通の人々がこのような苦しみに会い、子供たちや財産を失い、今も死ぬほどの病を負って苦しんでいる、というのならば理解もできます。

しかし聖書では、明らかにヨブという人はとても正しい人だと言っています。

彼の信仰の告白においても、何ら一点の曇りもないというこの人物が、実に大きな苦しみに会っています。

ところが、神様はその苦しみに対して、これがこうだから苦しむのだ、という結論を語っていません。

ヨブ記の最後の方にそういうふうを受け取れるところもありますが、この物語を単純に見ますと、神様がサタンに命じて「義人ヨブ」を苦しめております。

運命論か

さらに、それらのことをいじわるく見ていくなれば、神様が非常にエゴイスティクで、一方的であるようにも読みとれます。神様は人を、祝福したい時に祝福し、苦しめたい時に苦しめ、助けたい時に助ける。要するに、人間というのは神様から造られて、神様の思いのままなのだ、という考えです。しかし、そうだとすればこれは運命論になってしまいます。運命論の特徴は人格不在、人間不在になることです。人間は、非人格的「物」のレベルに落とされてしまいます。

ところが聖書を見ると、人間というのは神様に愛される対象として造られました。

人格を与えられ、自由意志を与えられ、神様にお応えするように、あるいは神様のものを拒否することもできるように造られています。

単なる運命論だとするならば、昔の人が言ったように、人間は生まれてからこの人と結婚し、何俵、何斗、何升、何合、何粒のお米を食べて、ある時（運命の時）になると病気になり、ある時になると交通事故に遭い、ある時になると病気が治り、また病気で死んだ、というようになります。

しかし、聖書全体は決して運命論ではありません。

神様が語りかけ人間が応えるという、愛の関係によって幸福と不幸が織り成されていきます。とくに、「義人ヨブ」が苦しみを受けたというところに、これらの問題がより深く私たちの心をひっかきます。

ヨブは決して自分勝手に生きていたのではなく、神様の御心にそって生きていたにもかかわらずこの苦難を得たからです。

さて、これらのことを考えながら、ヨブ記の章を追いつつ重要な聖書箇所のポイントを押さえつつ読んでいくことにしましょう。ここでお断りしておきますが、私自身はヨブ記について何度も何度も読んでおりますけれども、註解書や何かでじっくり学んだことがじつはありません。そういう訳ですから、自分自身が感じる読み方、今私自身が気づかされたヨブ記の読み方を、皆さんに紹介するだけで、この読み方が絶対だということではありません。

と言うのは、ヨブ記は多くの人たちが様々な方面から解釈をしており、それぞれに一理あります。

ですから、これも一つの理解方法であり、しかも私自身が今までに導かれてきた理解方法だということを皆さんに知っていただきたいと思います。

ですから、もし皆さんがこの話を聞き、今までの自分自身の理解にちょっと助けになるならばそれだけで十分です。

ヨブという人

ヨブという人物を見ていきましょう。

1章1節

「ウヅの地にヨブという人がいた。無垢な正しい人で（潔白で正しく…新改訳。ひととなりは全く、かつ正しく…口語訳）、神を畏れ、悪を避けて生きていた」

彼は、神様の前に純粋な正しい人、義人で、神を畏れ、悪を避けて生きておりました。

彼に七人の息子と三人の娘がおりました。

そして、ヨブはたいそう神様から祝福され、羊七千匹、らくだ三千頭、牛五百くびき、雌ろば五百頭など多くの財産や使用人を持っておりました。東の国、バビロン地方と思える国で裕福で最も幸福な人の一人でもありました。

ヨブは、自分自身が神様の前に正しく立つだけではなく、子供たちの罪のためにも神様にとりなしをしていました。

子供たちの誕生日が来るごとに、その子供たちのためにも神に犠牲をささげ祈る人でした。

神とサタンの試み

6節に、ある時、主の前に神の御使いたちが集まりました。その中にサタンもいました。神様がサタンに、「おまえはどこから来たか」と言います。

「地上のあらゆる所をめぐり歩いて来ました」と言ったので、主はサタンにヨブのことを言いました。

「私のしもべヨブぐらい正しい人がこの地上にいないということに、おまえは気がついたか。彼は神様を畏れて、悪を遠ざけているまれに見る素晴らしい人だ。」と。

それに対してサタンは、「神様、何ていうことはないですよ。ヨブがあなたを礼拝し、悪から遠ざかっているのは、実は、あなたが守っているからだ。あなたが囲って悪が近づかないようにしているし、災難が近づかないようにしているから、ヨブは正しく生きていられるであって、ヨブの信仰だとかなんとか、そんなものではない。あなたの守りがあるからだ。それじゃあ、あなたの守りをはずしてごらん。ヨブは豊かだからこそ、あなたを礼拝できているのだ。何事もないからこそ神様を礼拝して、教会に来ているのだ。信仰熱心にみえるだけで本当はそうではない。だからいったん彼が何かを失い、不幸に会うならば、神様、あなたをのろいますよ。ただ彼の人生は順調だから、『ああ、神様、ありがとうございます。感謝します。あなたを信じます。』と言っているだけなのだ。」と言いました。

そこで神様は、「それでは、サタン。ヨブの財産や様々のものを全部撃ってごらん。」と言います。

「主はサタンに言われた。『それでは、彼のものを一切、お前のいいようにしてみるがよい。ただし彼には、手を出すな。』（1章12節）」

神は、「彼自身には手を出すな」との一定の制約を加えましたが、彼自身以外の財産や何かは全部撃つてもいいと言ってサタンの手にヨブを任せます。この財産の中には子供たちも含まれていました。

サタンは主のもとから出て行って、ヨブの息子や娘が宴会を開いている時に、各地の敵を差し向けては災いを与えました。子供たちの命と、子供たちの妻や孫たち、財産も含めて全部を奪い取り、もう何も残らないほどの災難を与えました。

20節に、その時にヨブは立ち上がって、衣を裂いて髪をそり落とし、地にひれ伏して言いました。

「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。
主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ。」
(1章：21節)

淀川キリスト教病院の副院長であった柏木哲夫先生の、「人生の実力」というテープがあったので聞きました。その中で、実力のある人というのはどういう人かと言うと、「自分自身の存在をゼロに戻せる人だ」と言っていました。言うならば、裸で胎を出たのだから、裸で帰る。色々なことがあった時に、「どうせ自分は裸で生まれてきた身じゃないか」と思った時に、そこでゼロに立ち返れる人だというような内容

でした。なるほどなあ、と思いましたね。良く考えてみるならば、私たちは裸で生まれて裸で帰って行くのです。そして、たとえ色々なものを持っていようがいまいが、そんなのは何も関係なくなっていくます。

ヨブはここで罪を犯しませんでした。自分自身が大きな祝福を受けたといっても、「ああ、これは神様の恵みで与えられたものであり、それがなくなってもともとじゃないか。こんなことが起こっても今までに子供たちが与えられ、楽しみを与えられたことだけでも本当に満足ではないか。」というふうに考えたようです。そして、「このような時にも、ヨブは神を非難することなく、罪を犯さなかった（22節）」とあります。これはすごい信仰ですね。神様をのろわないで、本当にそのとおり受け止めてしまったわけですから。

さらなる試み

サタンはまた神様のところに来ました。
そこで神様がサタンに、
「ヨブを見たか。これだけの災いにあつたとしても、ヨブは私に罪を犯さなかった。だから、彼の信仰は、順調な人生だったから神を信じて礼拝している、というものではないだろう。ヨブは心底から神様を信じているのだ」と言います。

すると、サタンが答えます。
「皮には皮をと申します。まして命のためには全財産を差し出すものです（2章4節）」

要するに、人間はどこまでも自己中心だから、自分自身が守られている限り、たとえ息子や娘であろうと、妻であろうと夫であろうと他人じゃないか、と割り切ることができるものなのだ、と。世間もよくこう言いますね、「夫婦は他人の始まりだし、兄弟も他人の始まりだし、そうじゃないか。結局、あなたを愛します、とか、あなたの命が大事だ、と言っても、五右衛門は風呂に自分の子供を沈めてでも、（まあ、そんなことはなかったと思うのですけれども）自分が助かろうとしたじゃないか。結局、人は自分の命が大事じゃないか。それが人間じゃないか」と。同じように、だからヨブはすべてまわりが取られたとしても元気でいられるのだ。ヨブ自身の体がどうこうない限り、ヨブはまだ神様を礼拝し、神様を信じ続けることができるのだ、と言いました。

すると神様は言いました。
「それでは、彼をお前のいいようにするがよい。ただし、命だけは奪うな（6節）」。

ここに第2番目の守りがあります。

「命は奪うな」。これは、霊のことですね。

そしてさらに、

「サタンは主の前から出て行った。サタンはヨブに手を下し頭のてっぺんから足の裏までひどい皮膚病にかからせた。ヨブは灰の中に座り、素焼きのかげらで体中をかきむしった。」（7節）

要するに、今で言う瀬戸物のかげらで、かゆいところをかいて、うみを取り、皮膚がただれている状態までサタンはヨブの体を病氣だらけにしました。

ぐちゅぐちゅしたらいい病だったとも言われておりますけれども？そして、その姿を妻が見た時に、「あんたはどこまでお人よしなんだ。神様、神様っていい加減にしてよ」って言うほどでした。

「こんなになって、神様を信じる価値がない。神様をのろって死ね（2章9節参照）」とまで言いました。

自分の一番愛する妻にこうまで言われています。

自分の一番大事な神様を非難されて、自分の存在をばかにされました。

「ヨブは答えた。『お前まで愚かなことを言うのか。わたしたちは、神から幸福をいただいたのだから、不幸もいただくではないか。』（10節）」

これもすごいですね。

私たちは、たとえば、四十年間とっても幸せだった。

ところが、次の年に不幸になったりすると、四十年間の幸せは不幸な一年間によって全て消されてしまいますね。

そして、人はそれを、四十対一とは考えられないものです。

もう、すべてが不幸になってしまうわけです。

人間というのは本当にわがままだと思います。

かつてあれだけ「幸せだ。幸せだ。」と言ったあのことは全部忘れ去り、わずかの不幸をもつと全部が不幸になってしまったように思ってしまうものです。

しかし、ヨブは、「わたしたちは、神から幸福をいただいたのだから、不幸もいただくではないか。」と言いました。

皆さん、皆さんはこういうふうに言えるでしょうか。
なかなか言えないですね。
ここにおいても、ヨブはくちびるをもって罪をおかすことはありませんでした。

ここまでの聖書の記事を見ると、ヨブは神様を礼拝して歩んできましたが、今ここで不幸が彼をおそいました。
しかし、これらの不幸は、ヨブを神様から離れさせることなく、むしろこの試練によって信仰が純粹にされていった、とも言うことができます。

友人たちの訪問

ところが、問題は次からです。
ヨブに、親しい友人が四人おりました。まず、最初に三人登場してきます。テマン人エリファズ、シュア人ビルダド、ナアマ人ツォファル、の三人がヨブのところにやって来ます（11節）。三人は遠い所から、ヨブの不幸を聞いてやって来ました。ヨブの家に着いたら、家には何にもない。子供たちの家もない。ヨブは、というと、どこかで灰をかぶって座り、瀬戸物で自分の体のあちこちをかいては、頭のとっぺんから足の先までうみだらけになっています。
なにもかも全部失って、誰も近寄る人がないヨブの姿を見たとなんにも言えなくなり、七日間黙って見ただけでした。

ヨブの嘆き…自己否定

3章に入ります。

ヨブは口を開いて、まず自分の生まれた日をのろって言いました。

「わたしの生まれた日は消えうせよ。男の子をみごもったことを告げた夜も。その日は闇となれ。」（3・4節）

さて、ここからヨブは自分自身の生まれた日をのろいました。ヨブはこれらの出来事をずうっと耐えていたのですがここから本音が飛び出し始めます。

友だちが来て、彼らが七日間自分自身を見つめていたことも知っています。

そして、やっと口を開いた時のヨブは、「裸で生まれて来たのだから裸で帰る。幸福をいただくから不幸もいただく」と言ったヨブとはだいぶ変わってしまっていました。

人間が、不幸の極みというものに達する時に出てくる一つのパターンは同じようです。

それは、まず、「自分自身の存在否定」をすることです。

「自分は生まれなければ良かった。自分は生きていなければ良かった。自分はこの世にいないければ良い」と言いただきます。

不幸に耐えられない自分になると、自己否定することで不幸な問題を解決しようとするわけです。

すなわち、問題を否定したり解決できないので、その不幸な問題に直面する自分を否定しようとしています。

それが3章全体の言葉です。

ヨブは、「ああ、自分が生まれた日はのろわれよ。その日なんかなければ良かったんだ。男の子が胎に出て生まれておめでとうなんて、そんな日なんか消えうせよ。」と言っているのです。

ヨブの嘆き…親否定

自分自身の存在を否定しようとする、当然そこに必ず結びつく存在がありますね。

それは、親という存在です。

「なぜ、わたしは母の胎にいるうちに死んでしまわなかったのか。せめて生まれてすぐに息絶えなかったのか。なぜ、膝があってわたしを抱き 乳房があって乳をのませたのか。それさえなければ、今は黙して伏し 憩いを得て眠りについていただろうに。」（11～13節）

と言って、自分を生んだ親を疎ましく思うしかなくなります。

「なぜ、おれみたいなのを生んでくれたんだ。なぜ、生れた時に乳房があって、おっぱいなんか出やがったんだ。」と、なりますね。

「むしろ、おれは生まれた日にもう墮胎された子のような存在になってしまえば良かったんだ。親が勝手に産んだから、不幸なおれが存在してしまった。」となり、親に対してものすごい文句となります。

ヨブの苦しみ…因果応報

さらに、その次に文句を言うのは神様にむかってです。自分の存在を不幸だと思う人は、自分自身の存在を否定し、次には親をのろい、次には神様をののしっていく以外に生きようがありません。

4章に入ると、友人が来ます。最初は、テマン人のエリファズが話しを始めました。

「あなたは多くの人を諭し 力を失った手を強めてきた。あなたの言葉は倒れる人を起こし、くずおれる膝に力を与えたものだった。」（4節）

と、言いました。

「ヨブよ、あんたっていうのは本当に多くの人たちに教えを与え、皆を教え導いて、弱っている人たちを助けて来たじゃないか。」ところが、

「だが、そのあなたの上に何事かふりかかるとあなたは弱ってしまう。それがあなたの身に及ぶと、おびえる。神を畏れる生き方が あなたの頼みではなかったのか。完全な道を歩むことが あなたの希望ではなかったのか。」（5、6節）

ここで彼は、「ヨブよ。あなたはあれだけ皆に教えていたのに、わしゃ今がっかりしたよ。」って言っています。さらに、「お前は、誰かが病気の人がいると、『病気に負けてはいけない。ああいうふうにすると病気を乗り越えられる』と教えていた。また人生につまずいた人を見ると、『こうすればいいんだよ』と教えていた。しかし、いざ自分自身に病気や人

生の困難がふりかかって来ると、生まれなかったほうが良かったとか、神様はなんとひどいなどという。これはいったいどういうことだ。ヨブ。」と。

彼はヨブの今までの生き方に疑問を投げかけます。

そして、エリファズは彼の人生論の結論をヨブに言います。

「考えてみなさい。 罪のない人が滅ぼされ 正しい人が絶たれたことがあるかどうか。（7節）」

彼がここで言っていることは、因果応報のことです。因果応報、すなわち、「人が善に励むのは善を得たいからだ。人が悪を嫌うのは、自分の身に悪がふりかかるのがいやだからだ」。そして、世の中は因果応報なのだから、「ヨブ。あなたが今、苦しんでいるということは、あなたは以前に自分を義人と思っていたかもしれないが、実はそうじゃなかったのだ。あなたには罪があったのだ。だからこそ今、このような現実を受け取っているのだ。ヨブよ、あなたはかつていいことを言って、自分は何でも知っているかぶりをして、自分は正しいふりをしていただけでも、そうじゃないってことなんだ。悪のない人が苦しむなんてことが、どうしてこの世界にあるのか。ましてや神様がいるならば、そんなことはないはずだ。」と。

ここに「神」というお方がはいる、神がいるとすれば善人は祝福を受け、悪人は不幸を受ける、というのです。この問題は人類がいつも追及してきた問題です。

しかし、現実を見るとそうとも言えないことがわかりますね。よく、「善人の若死に」って言いますね。

「あんまりいい事するなよ、すぐ死んでしまうから。」なん

て、よく冗談を言いますね。

あるいはその逆に、「憎まれっ子世にはばかる」とも言います。どうも私が見ていますと、いい人が長生きして祝福されるよりも、悪い人がこの世を謳歌して長生きし、いい人と思える者が苦しめられて病気になって早く死んでいくようにも見えますが皆さんはどう思うでしょうか。

今の世界、この現代の世界よりももっと昔はそう見える出来事が多かったのではないのでしょうか。

殿様がいて、威張って「やあやあ、戦争に行けえ」と命じては、本当に貧しい人々が死んでいく。赤紙一枚で、貧しくても善良であろうとする市民が簡単に早く死んでしまう。しかし、それを指揮して悪を行っている人は、防空壕の中で生き延び、戦争が終わっても財産を失うことなく安泰に生き、むしろ戦争を糧にして商売をしては栄えていくというような現実を見かけます。

そのようなとき、どうもこの世界は因果応報とは逆のような世界、むしろ悪を行った者が世の望む報いを受け、良いことを行った者が悪い報いを受けてしまう現実の姿を見ます。

人類の究極的哲学

むしろ、インド哲学の方が、これを乗り越えてしまったといえます。

それは仏教の一つの中にあります。

すなわち、ヒンズー語でニ・ネーバー（それは無い）という全否定の言葉があるそうです。

全てを否定するとは、非人格（ブラーム）になることを意味します。ようするに、因果応報とかそういうものでは問題は解決しない。では、人生はどのようにしたら解決できるか。

ニ・ネーバーからブラームという非人格になることだということです。

たとえば、そこに女性がいるとします。

女性がそこにいると思うからこそ、情欲がわいてくる。そんなものはニネーバー（それは無い）であり、わたしはブラーム（非人格）だ。だから、本当はなにもないのだ。

また、自分の欲しい素晴らしいものがあるならば、素晴らしいものがあると思うからこそ、それを欲しいと欲してしまう。

そんなものは、本当はないのだ。自分自身の存在すらないのだから、となります。

これはすごくいい方法ですね。

ここに到達できたら本当の悟りを得たこととなりますね。

でも、これ、本当にできるのでしょうか。

それは不可能です。人間にはそんなことはできません。

それは、うそ偽りです。

それこそ、自分自身で暗示をかけて自分をだます以外のなにものでありません。

彼はなおも責めたてます。

「ヨブよ、おまえの今の結果は何か。おまえに悪があったからこそ、神様がお前を責めているのだ。おまえの悪がこの現実を招いているのだ」と。

原因がわからないという苦悩

さて、6章に行きます。

ヨブは、色々言われていくうちに、彼の心はさらに変化します。自分自身の存在をのろい、親がどうして自分を生んだのかと言って親を責めましたね。そしてヨブは、

「全能者の矢に射抜かれ わたしの霊はその毒を吸う。神はわたしに対して脅迫の陣を敷かれた。（4節）」

と言うようになります。

すなわち、「自分がこういうふうになっているのは、神様が自分にこうなるようにしているからだ」と。

そして今度はその矛先を神様に向けました。

神様を責めだします。

「神よ、わたしの願いをかなえ 望みのとおりにしてください。神よ、どうかわたしを打ち砕き 御手を下し、滅ぼしてください。」（8・9節）

ヨブは、「神よ、私を一思いに殺して下さい」と言いました。しかしこれは、ヨブの本心じゃありませんね。

本心じゃなくて、神への腹いせです。

「神様、自分をこんな半殺しみたいにするのだったら、一思いに殺したらどうだ。」と言って、神様に対して文句を言っているんです。

でもヨブは、そうは言うものの、やはり信仰を持っていた人ですから、そういいながらも迷っています。

そうするとヨブは、まだ謙虚さを失っていませんね。

そして、

「間違っているなら分からせてくれ 教えてくれれば口を閉ざそう。」(24節)

とも言います。

「神様、色々文句を言っているけれども、本当のことを言うなら、私は自分自身がなぜこうなっているかを知りたいからなんだ。だから神様、私に教えてください。それがわかれば私は黙るから。悟るから」と。

ここに、なぜ、この苦しみがおそっているのか、今の苦しみの意味がわかりません。

人は、苦しみの意味がわかるときはまだ苦しみに耐えられるものです。迫害に会っている人たちは、意味がわかるから耐えていられるのでしょう。

しかし、意味がわからないことは苦しいと思います。

多くの今の青年たちは、生きる意味がわからないので苦しいと思います。

私自身の青春時代は、ある面においてそういう苦しさはありませんでした。

それは、貧しかったことでがむしゃらに今日を生きなければなりません。働きながら十六才で親から自立して、高校も自分で行ったし大学をも自分で、というようでしたから、すべて自分の力で生きてゆかねばならなかったのが、今日食べていくことに追いかけられて過ごしたからです。

しかしそれは、ただ生きる意味が何かを考える暇も無かったためです。

しかし、その日を生きるという目標はあったわけです。

神の偏見か

さて、やがてヨブ記の7章にはいります。

特に、

「人間とは何なのか。なぜあなたはこれを大いなるものとし、これに心を向けられるのか。（7節）」

と言って、神様が人間に対して、心を向けて干渉することについて言っております。

そして、

「人を見張っている方よ わたしが過ちを犯したとしてもあなたにとってそれが何だというのでしょうか。なぜ、わたしに狙いを定められるのですか。なぜ、わたしを負担とされるのですか。なぜ、わたしの罪を赦さず、悪を取り除いてくださらないのですか。今や、わたしは横たわって塵に返る。あなたが捜し求めても、わたしはもういないでしょう。」（20・21節）

と。

ヨブの言い分は、どうも神様が自分一人を狙い打ちにしている、というふうに思っているようです。

他の人よりも自分に干渉している。

他の人だったらあまりよく見ないから、小さな罪も見当たらない。ところが自分に対しては、重箱の隅をつつくようにして、干渉して干渉して、ああ、ここも悪い、あそこも悪い、これもだ、あれもだと言って、やっつけようとしているように思えたようです。

皆さんは、何かのことでそういうふうに思ったことがないでしょうか。

「なぜあの人と同じ悪いことをしていながら、自分は多くの苦

しみを得ているのに、あの人は苦しまないのだ。自分だけが、なぜこんな重荷と不幸を負って生きていなければいけないのだ。あの人だって同じことをしているのに。」

と思うことが人生に度々ありますね。

自分だけが何か神様に責められて、自分だけが厳しく取り扱われているように思ってしまうものです。

ヨブは今そのように考えています。

迷宮入り

8章に行きます。
今度は第二番目の友人が登場します。
ビルダドという人です。
実はこのビルダドという人も、他の人たちとほぼ同じレベルでヨブに語っていると思えます。

彼は、
「また、あなたが潔白な正しい人であるなら 神は必ずあなたを顧み、あなたの権利を認めて、あなたの家を元どおりにしてください。」
と言っていますが、彼の言葉の全体をみると、最初の人、エリファズと同じです。
「もしあなたが潔白だったら、こんなふうにはならないのだ。」と。
「もしあなたが潔白だったら、神様はあなたを祝福してくれるから」と言う言葉の本心は、「祝福してもらえていない自分の姿でお前が正しくないということなのだ」と言ってヨブを責めていることです。

それに対してヨブは9章に入って、
「ヨブは答えた。それは確かにわたしも知っている。」
(1、2節)

因果応報とかそういったことは、わたしも知っている。
「神より正しいと主張できる人間がらうか。(2節)」
と、頭ではわかっているんですね。

頭でわかっているのと、それを認めるということは、別問題です。ですから、私たちが誰か困難な人に忠告する時に、その人はもうわかっているのです。

そんなことはわかっているが、しかし、それを自分自身が納得して受け止められないからこそ苦しんでいるのです。

だから、だれかに忠告していく時は、相手はわかっていることですから、忠告されることで重荷になってしまうということを考えに入れておく必要があります。

さらに10章に入ります。

また、ヨブは友達から裁かれ、さまざまな見当違いのことを言われていく中で、神に向かって、

「神にこう言おう。『わたしに罪があると言わないでください。なぜ私と争われるのかを教えてください。』」（2節）と訴えます。

これは、ヨブの本心であり、一番知りたいことそのものです。

そして、

「なぜ、わたしを母の胎から引き出したのですか。わたしなど、だれの目にも止まらぬうちに 死んでしまえばよかったものを。あたかも存在しなかったかのように 母の胎から墓へと運ばれていけばよかったのに。わたしの人生など何ほどのこともないのです。わたしから離れ去り、立ち直らせてください。」（18～20節）

ヨブは、「神様、なぜあなたは母の胎にわたしをつくったのか。どうか、わたしに干渉しないでほしい。母の胎につくるってことすらもしてほしくなかったのだ。」と叫びました。

11章から、ナアマ人ツォファルという第三の男が出てきます。彼も前の二人と同じことを言っていると考えてもいいと思います。彼は、「ヨブよ、あなたがこういうふうになり、またあなたが神様の前に色々訴えて、自分が正しいとか言っているが、問題はあなた自身が罪人だからなのだ。あなたのどこかに悪いことがあるからなのだ。」と。

以上三人の友人たちの意見を聞いていると、今日ある諸々の宗教と同じだと言えます。

人々の恐怖をあおり立てて人々を引きつけようとします。もう、「あなたの先祖の霊が…。先祖の罪が…。過去の罪が…」などと言われたら、もうどうしようもなくおびえるだけです。

自分ではもう手が届かないのですから、相手の言うなりにそこをお願いするしかなくなります。

百万円、二百万円、三百万円の壺を買ったり印鑑を買ったり、寄付したりするわけです。

それは喜びから寄付しているのではなく、恐怖からです。因果応報の考えは、人をして自分の罪の奴隷にし、正気を失わせ、時には高慢にするだけです。

さて、こういうふうに、友達と論争していくうちに、ヨブの心はいよいよ変化していきます。それが12章です。

「確かにあなたたちもひとかどの民。だが死ねばあなたたちの知恵も死ぬ。あなたたち同様、わたしにも心があり、あなたたちに劣っていない。だれにもそのくらいの力はある。神に呼びかけて、答えていただいたこともある者が、友人たちの物笑

いの種になるのか。神に従う無垢な人間が 物笑いの種となるのか。人の不幸を笑い、よろめく足を嘲ってよいと 安穩に暮らす者は思い込んでいるのだ。」（2～5節）

と言っています。

ここでヨブは、今までと少し方向を変えて、友人たちと真正面に向かい合っていきます。

ということは、神様から目を離し始めているんです。

神様ではなく、友人たちが来て、彼らから色々な議論をしかけられ、それを受けているうちに、友人たちがヨブの相手になってしまっていますね。

これは、人が神様から外れて間違っていくときの非常に危険な一つのポイントです。

三人の友人の正体

さて、15章に行きましょう。
ここで詳しくお話をします。
今までのことをまとめた形で、三人のことをお話しして行きま
す。

15章1節で、「teman人工リファズは答えた」とあり、また
もや友人がヨブの前に出てもっともらしいことを言い始めま
す。そこで、まず、この三人の友人たちの特徴をお話します。

この三人の友人たちはどんな人たちかということを、皆さ
ん、理解してほしいのです。

この三人の人たちは、言うならば、「ザ・世間」というような
ものです。いいですか。要するに、「ザ・この世」と言い換え
てもいいです。

この三人は、この世の代名詞、すなわち「この世」だというこ
とです。

この世の人たちは、皆この三人と同じことを言っています。

それでは、この世というのはなにを基準として生きていくか
と言うと、それは三つあります。

第一番目は、出来事判断です。

要するに、現実の現状、起こっている出来事をもって、判断
しているのです。

だから、その人が不幸だとするならば、「ああ、罪がある」と。
その人が喜んでこういうふうなことをしていれば、「ああ、こ
の人は善人だった」と。

すべて一事が万事、「あ、健康だ。この人はいい人だ」。

「ああ、障害を持っている。この人はどこかで罪があったにちがいない」というように判断します。

「この人はお金持ちになっている。こんな立派な家を建てて。ああ、努力家のいい人だからだ」と。

ところが、みすぼらしくなっていると、「あの人は努力しなかった。根がくさっている。」というように、すべて、出来事というものをもって判断していきます。

だから、この因果応報というのは、出来事判断ということですよ。出来高払いのように、出来事が判決です。

悪人は罰を受け、良い人は良いものを得る。

だから、現実から割り出していくわけです。

いい人が悪い人か、良かったか悪かったか、ということを実際の見えることから判断しようとしています。

だから、出来事が多ければ、言うならば物質的に豊かであるならば、何事もなく過ごしているならば、健康であれば、その人は善人だ、となります。

「私はとても幸せよ。だってヨーロッパに三回も行けたんだもの。あの人はまだ一回だわ。」なんて、これと同じですね。これが喜びであり、これが何かものすごく生きがいであり、命のように感じてしまっています。

「うちはまだいいわよ。三度食べられるから。あそこは二度だって」。これが何か命の保証や幸福と不幸の規準みたいに思っています。

だからヨブの出来事を見る時に、ヨブは不幸になっている。これはきっと悪があったからこうなっているにちがいない。

この人は今病気をしている。これはきっと悪い事があったから、こういうふうな病気になったにちがいない。
要するに、この世というのは出来事から判断してくる。
基準が出来事です。

第二番目は、相対という基準です。

その出来事を判断する基準は、相対の基準によってです。相対というのは、常に比較ですね。あの人に比べてこうだ、あの人ができなかった事をわたしができる、というように、常に比較の世界で判断します。相対の世界には、結論がありません。ある人が自慢げに、「一千万円も貯めちゃった」などと言っても、五億円持っている人がいたりすると、もう全然ダメですね。死に物狂いで貯めた一千万円貯を、「すごいなあ」と思っても、それ以上の人の前では死に物狂いの努力も評価されないどころか、少ないと言われて批判を受けることにさえなります。でも一千万円をもってアフリカに行ったらすごいでしょうね。日本で貧乏でも、そのような国に行ったブルジョアということになります。

何事にもそうです。相対の世界では結論というのは絶対ないのです。結論がないから議論が起こります。絶対というものがあつたら、議論というものはなくなってしまいます。絶対があつたら、自分に対しての絶対の評価がくだされ、もう議論の余地はありません。世間は相対だから議論が絶えません。

相対の世界で自分を正しい者にしようとしたら、相手を打ち負かすことによってです。たとえば、相手が十を持っている。

自分は五しか持っていない。ところが、議論をして、「だって私は五だけど質がいいもん。」と、こういっては相手をやっつけるわけですね。これで相手の十という数の優位を、五という質を持ってくることによって、すなわち議論によってひっくり返そうとするわけです。これが議論です。結論はないですね。

第三番目は、自己中心という基準です。

この世というのは、結局は自己中心という基準ではないでしょうか。

出来事、相対、そしてそれを貫いているのは自己中心です。ですから、自分自身が幸福になるためには相手を非難することになります。相手を非難していくしかなくなります。

そして、相手の不幸というのを見て、自分自身の幸福を確かめていくしかありません。

全部の人が自分より幸福だったら、自分は一番不幸な人になります。ところが、自分より不幸な人を見つけると自分の幸福を感じます。さらに進んで、積極的に不幸な人を造ることで安心を造ろうとする人さえ出てくる始末です。

不幸な人を造ることは、積極的な自分の幸福を造ることにすらなります。

このような基準で生きているのが、登場したヨブの三人の人たちです。三人の人たちは「神様」をもってきていますね。そうです、この世の人たちだって、神様をもってきますよ。そして、ヨブを教えようとしています。愛情のこもった言葉がどこにもないことから、結局は責めたてているにすぎませ

ん。まことしやかなことを言っているようですが、ヨブの不幸をもって自分の正しさを主張しているのです。

引き下げられたヨブ

と同時に、ヨブの問題は彼らのレベルに引き下がってしまったところにあります。

ヨブは正しく生きて来ました。

三人の友人より、はるかに正しい生活をしていたことを確信できます。そして災いをとおして、ヨブの信仰はさらに純粹にされたんです。

ところが、そこに三人の友だちが来ました。

一週間、三人の友だちに見つめられ、彼らと議論になってゆくにしたがって、「もう自分には頼るものは、あなたしか何にもありません。」と思っていたヨブでしたが、チラッチラツと三人の友だちを見始めました。

そうしたら、友だちは自分のために悲しんで涙を流しているようには見えず、むしろ自分を責め立てる。するとヨブの心には、「あいつら、おれを何とと思っているだろうか。かつてはおれの方が上だったのに、今ではあいつらから見下げられるようになってしまった。あいつら、きっとおれの罪をさがしているだろうな」と考え始めたに違いありません。

神様を見ていたヨブが、友人を相手に議論しているうちに世間を見始めました。

だから、神様とヨブの間に世間が入ったのです。

三人の友だちが入って来たときから、ヨブは、神様を直接みる

のでなく、世間を通して神様を見る人間に変わってしまったのです。

この世は、出来事、相対、自己中心の三つの基準で動いています。

自己中心ということは、言葉を変えて言うならば、自分で自分を救っていくということです。

だから、自己中心です。徹底的に自分で自分を救っていかなくてはならない。どういうふうにして救うのか。

それは、自分よりも不幸な人を見ては、自分自身を救っていかなくてはなりません。

あるいは議論して相手をやっつけることによって、自分自身を救っていかねばならなくなるのです。

ヨブの祈り

ヨブは16章に入って、自分がこのようになれたらという思いを語っています。

それは、

「このような時にも、見よ、天には私のために証人があり、高い天には、わたしを弁護してくださる方がある。わたしのために執り成す方、わたしの友、神を仰いでわたしの目は涙を流す。人とその友の間を裁くように、神が御自分とこの男の間を裁いてくださるように。僅かな年月がたてば、わたしは帰らぬ旅路に就くのだから。」（16章19～22節）

彼は、「自分はこんなに議論し、義と不義を語っていても、もうすぐ死ぬんだ。でも、やはりその前に、誰か自分を執り成してくれる人がいないだろうか。」と言っています。

同じことが、9章にもあります。

9章の33節を見て下さい。

「あの方とわたしの間を調停してくれる者 仲裁する者がいるなら」

と考えていました。

ヨブは誰かに頼みたいんですね。

自分の救いを頼みたいんです。

友人たちの批判の出どころ

さて、その後をどんどん進んでいきます。20章に行きます。ここでもナアマ人ツォファルがまた答えます。

「あなたも知っているだろうが、昔、人が地上に置かれたときから、神に逆らう者の喜びは、はかなく、神を無視する者の楽しみは、つかの間にすぎない。（4・5節）」

彼は「ヨブよ、お前が栄えていた時期があったけれども、それは一時なんだ。なぜならば、逆らう者の喜びとか楽しみというのは、一瞬なのだから」と言って、ここでもやはり、同じように責めてたてます。

さて、彼らがなぜ批判できるかということを見ていきましょう。

第一番目は、自分自身が同じような経験をしていないからです。そして、自分自身が不幸に会わないというのは、自分が善人だからじゃない、ということを知らないからです。時々、私たちはやっぱり因果応報にまどわされてしまうものです。

「ああ、あの人はこんなふうになっている。こういうふうになればいいのに。」と思います。

ということは、逆に言えば「私はそういうふうになっているのに、あの人はやらないからこういうふうになってしまうのだ。」ということになりますね。

非常に厳しく冷たくなって、むしろその人を苦しめます。

人間というのは、他人の生き方は決して経験できないものです。同じ出来事に同じ量の出会を経験しても、その人の生まれ

たときからの能力だとか、あるいは賜物だとかはちがいますね。

だから自分自身の経験というのは、相手にはほとんど通じないものです。それを、相手を自分と同じようにしてしまおう。そしていつの間にか、自分自身がヨブみたいになっていないということで、自分は正しい人間だと信じ込むようになります。だから、彼らが主張しているのは、ヨブの罪深さよりも、神様の前における自分の正しさなのです。

第二番目は、彼らは神様に自分自身の人生を本当に賭けていないからです。

どこでそれがわかるかと言うと、神に賭けている人は、他人を非難しないものです。

本当に自分自身の人生をかけている人間は、人を非難できないんです。自分と神様の関係が良くわかるからです。

自分が今日十分に食事を食べられたとしても、これは神様の恵みだとわかります。

自分が何か能力があったとしても、これも神様から与えていただいた恵みだとわかります。

健康も財も能力も家族も全ては神様の恵みであって、自分で誇るものは何にもないと知っているからです。

友人たちは苦しむヨブと比較して、自分を義人として見ていました。

聖書で、神様が一番きらうことは、自己義認です。

他人と比較して自分を義とし、自分で自分の義をうちたてようとする人こそ神様に一番遠い人です。

一生懸命自分で善い事をつくっていこうとする人、これ、罪人だと聖書は言います。

神が災いを許したとは

さて、ずっとこの後も論争が続きます。
29章をごらんください。

「義人ヨブ」と、最初に書いてありましたね。
それでは、なぜ義人なのに、ヨブがこんな苦しみに会うのか。
やっぱり、何か原因があったのだろうか、ともう一度思い返しえて
みましょう。

無駄なことをしないはずの神が、ヨブに加えられる災いを許した
ということに注目してみる必要があります。
神様は面白半分に、「この人を苦しめて、どのくらい忍耐力がある
かどうか調べてみよう」と言い、「病気よ、あの人のところに行け。
サタンも行け。不幸も行け」と。
そして「おうっ、がんばっているな。こいつは思ったよりなかなか
かしづといなあ。ああ、こいつはやっぱりまいっちゃった。」など
ということを愛なる神ができるでしょうか。
そうして、神様は一人で喜んでいただけるでしょうか。
そんなはずは決してありません。

神様がヨブにこのことを行ったということは、必ずヨブに必要な
ことだったからです。
これは聖書全体からの真理ですから、信じていいことです。
ヨブに不必要な、ヨブをからかうようなことを、神様は絶対にし
ない。

ヤコブ書の中に、

「神は悪を行うことはできない。」

(ヤコブの手紙1章13節参照)

とあります。

そうするならば、やっぱりヨブに必要なだからこそ、神様はこの試
練を与えたはずです。

恵みに乗ってしまったヨブ

その原因を探るとするならば、唯一29章にあります。
まずはヨブの嘆きが書かれています。

「どうか、過ぎた年月を帰してくれ 神に守られていたあの
日々を。あのころ、神は私の頭上に、灯を輝かせ、その光に導
かれて、わたしは暗黒の中を歩いた。神との親しい交わりがわ
たしの家であり、わたしは反映の日々を送っていた。あのこ
ろ、全能者はわたしと共におられ、わたしの子らはわたしの周
りにいた。乳脂はそれで足を洗えるほど豊かで、わたしのため
には、オリーブ油が岩からすら流れ出た。」

と言って、自分がとても豊かで、何の不幸もなく、喜んで
生きていた頃のことを思い出しました。

ところが7節からガラッとニュアンスが変わります。
あの繁栄はなぜか、と、ヨブは主張し出したんです。
自分自身があれだけ幸せだったのは、あれだけ物を持って、皆
から尊敬されていたのはなぜだったのか。
7節に、「わたし」と出て来ますね。
この後、終わりまで「わたし」という言葉が18回出て来ていま
す。

まず7節に、
「わたしが町の門に出て、広場で座に着こうとすると、若者ら
はわたしを見て静まり、老人らも立ち上がって敬意を表し
た。」

わたしが町に出て行ったら、「ヨブ大先生」と言って、若い人も年寄りも、皆がわたしに皆が寄ってくるんです。

9節には、

「おもだった人々も話すのをやめ 口に手をあてた。」

もう有名な人たちも、議員たちさえも、わたしの前に出たら話すのをやめてしまうんだ。

そして、「ヨブ先生、何かお話を。」と、寄って来るんだよね。

11節に、

「わたしのことを聞いた耳は皆、祝福し、わたしを見た目は皆、賞賛してくれた。」

だれであっても、「ああ、ヨブという人は素晴らしい、ヨブは素晴らしい。」と言ってくれた。

12節に、

「わたしが身寄りのない子らを助け 助けを求める貧しい人々を守ったからだ。」

わたしが貧しいものや困った者たちを守ってあげたんですよ。

13節に、

「死にゆく人さえわたしを祝福し、やもめの心をもわたしは生き返らせた。」

死んでいく人が、自分のことで精一杯なのに、「ヨブさん、祈って下さい。ヨブさんに祈っていただければ大丈夫です」というんですよ。

14節に、

「わたしは正義を衣としてまとい、公平はわたしの上着、また冠となった。わたしは見えない人の目となり歩けない人の足となった。貧しい人々の父となり わたしにかかわりのない訴訟にも尽力した。」

わたしはよいこと以外はできないんです。
目の不自由な人や、足の不自由な人へも手を貸してあげました。自分に関係のない裁判すら、わたしはそこに行って助けて上げたんだ。

ずっと読んでみて下さい。
ここに、あれだけ神に祝福されていたのに、いつの間にかヨブは、自分の義に変わり始めていたということがわかりますね。どうも神様はこれを見ていたようですね。

アブラハムがイサクを持った時、与え主ではなくて、神様が与えた賜物であるイサクが神様になりはじめました。
その時に、神様はアブラハムに、「イサクを殺せ」と言いましたね。
ヨブも、あまりにも祝福されて恵みを受け続けていくうちに、ヨブの心は目に見えないところで傾きはじめていたんです。

それは、自分の義。
私はこれだけ燔祭を献げている。
これだけ礼拝をしている。
これだけ献金をしている。
これだけ奉仕をしている。
というように、いつの間にかそういう心が彼の中に出てきてい

たのでした。

神様の恵みを自分に奪ってしまって、自分の義に変えてしまった。

神様がヨブに対してサタンの試みを許したとするならば、以上の理由しか考えられないのです。

聖書全体からしても、神様はその人に、愛するがゆえに試練を許しています。

けれども、苦しめる目的で何かをするということは決してないのです。

[以下のエリフについては、
二つの見方を述べることにします]

①エリフ…義の裁き人

32章に移ります。

ここに、エリフという四人目の友人が出てきます。

先ほどの三人とは、かなり考え方が違っています。

彼は若い人でした。

「ここで、この三人はヨブに答えるのをやめた。ヨブが自分は正しいと確信していたからである。さて、エリフは怒った。この人はブズ出身でラム族のバラクエルの子である。ヨブが神よりも自分の方が正しいと主張するので、彼は怒った。また、ヨブの三人の友人が、ヨブに罪のあることを示す適切な反論を見出せなかったので、彼らに対しても怒った。(1～3節)」

もう、三人の人たちとヨブの会話を聞いていて、怒りが出てきたんです。友だちにも怒った。なぜなら、彼らがヨブをやり込めることができないで、ただむなしい議論をくり返しているからです。

そこでエリフは口を開いて言います。

「わたしは若く、あなたたちは年をとっておられる。だからわたしは遠慮し、わたしの意見をあえて言わなかった。」

(6節)

何日も何日もあなた方を見ていて、あなた方は年をとっているから悟りがあるはずなのに、何もすることができなかった。そして、このエリフは論々とこれから語り始めます。

さて、このエリフの言葉を見て行くと、三人の友だちとはレベルがちがうとわかります。

エリフの言葉は、「あれっ、これは神様が言っているんじゃないか。神様がエリフを通してヨブに言っているのではないか。」と思うほどにもう本当に素晴らしいんです。

彼の言葉は、神様の言葉と置き換えていいぐらいです。

ところが、神様の言葉を人間が語っているところに問題があるのです。

すなわち、エリフの言うことは全部正しいです。

しかし、彼の問題は何かと言うと、愛がないことです。

三人の友だちはまだ世間一般並みですね。

神様という言葉を用いてくるけれども、視点が世間一般でした。

ところが、このエリフというのは、世間一般のことを言ってい

るのではなく、神の立場で言っています。
三人の友だちはヨブと同レベルだと言うことができます。
ところがエリフはヨブと同レベルじゃない。
もう完全に神の立場に立っています。
そしてそこから、ものをズバッ、ズバッと神の言葉と思えることを語り、また、それがまちがいのない言葉になっています。

皆さん、これが危険なんです。
人を殺すんです。立ち上がらせないようにしてしまいます。
見て下さい。三人の友だちがヨブに語りかけたら、ヨブは反論していましたね。
ヨブが反論すると友人が反論し、それにまたヨブが反論することを繰り返していました。
ところがエリフが話し始めてから、ヨブは一言も言っていません。要するに、ヨブは言えなくなってしまいました。
逆に言うならば、エリフはヨブに言わせないのです。
そうです、こういった意見が人を殺します。
神の言葉をもって、その人が反論できないぐらいにしてしまうということです。
やっぱり、私たちが人々に色々な意見を言う時には、相手に反論させるといふ、これをしていかななくてはいけないのに、いつの間にかガーッと押さえつけてしまって、それを正しい言葉を持って押さえつけてしまって、相手に何も言えなくさせてしまうということです。

これは神様からその人を離れさせますね。
これがエリフの姿であります。
要するに、義があるけれども愛がないということです。

これは人を裁くだけになります。心底、魂の底まで裁きます。だから、エリフが話し始めた32章から、ヨブは一言も答えていません。エリフとの間に会話ができません。エリフが一方向的にしゃべっているわけです。

批判というのは、批判のための批判であってはいけないと思います。

批判は、必ずその人を立ち上がらせるための批判でなければいけない。そこには相手の弱さだとか、色々なことを覆おうとする心がなければなりません。覆おうとする心があるならば、どうなるかと言うならば、ヨブのために祈るようになります。でも、エリフには祈りなどありません。三人の友だちもありませんでしたが。

皆さん、私たちは色々なことを言うけれども、相手のために祈っているだろうかと考えてみなければなりません。

その人に文句を言っているだけではないでしょうか。

「あの人がこうすればいいのに。私の言うことを聞かないから…」、こうなってしまうんだと、文句だけを言ってしまっていないでしょうか。

それはやっぱり、正しくないですね。

私たちは本当にその人のために祈っているか、自分でわかるはずです。

本当に祈っているかどうかというのを、確かめてみて下さい。そうすると、私なんかもそうですけれど、ある人のためには本当に祈ってはならず、批判だけをしています。それはエリフです。

私の批判は、自分の考えというよりも、神様の言葉で批判しているのです。それはエリフです。

そのことは、人を立ち上げさせません。

そしてエリフこそは、律法クリスチャン、ともいえないでしょうか。

しかし、四人目の友人エリフについては注意が必要です。そこで、私の一番近い姉妹の説をここに加えておこうと思います。

このメッセージは「ヨブ記の読み方」となっていますので、いくつかの違った意見も大いに参考になると思います。

②エリフ…義の宣教者

先に登場した三人の友人は「この世」との代名詞で表しました。しかしエリフの存在はこの世をはるかに超えていることがわかります。

まず、彼がこれから語りだそうとする動機が明確です。

「しかし、人の中には霊があり、悟りを与えるのは全能者の息吹なのだ」（32章8節）

「神の霊がわたしを造り、全能者の息吹がわたしに命を与えたのだ（33章4節）」

以上の箇所からしても、エリフが神から遣わされて旧約の時代を担った預言者たちと同じスピリットをもっていることがわ

かります。

また、最初から語りださずに、ヨブと三人の友人の姿を見つめていたのも、彼は自分のことを主張するために着ただけではなく、物事の本質を表して語るために来たとも受け取れます。

さて、ヨブは友人たちと議論していくうちに自分を見失ってしまいました。

自分を見失うとは、自分から目を離してしまうことではなく、神から目を離して、より自分自身を見つめてしまうことです。そしていつの間にか、自分の主張を始めてしまいました。ヨブは、友人たちとの比較、世間と自分との比較に走ってしまったのです。

私たちの信仰は、人々や世間を基準にするのではなく、あくまでも神ご自身であり、神の前における自分自身です。そのような立場に立っていると、人は神の声を聞けなくなります。

その者が神の声を聞けるようになるには、神の前における自分の姿を知る以外にありません。

預言者たちが神に遣わされて言葉を語ったのは、神を基準としてのあなたはどうか、ということでした。

だれでも弱さを持ち、短所を持ち、限界や自分で造ったのでない重荷や罪をもちます。

しかし、弱いから、自分の責任でないから罪が赦されて御国に入れるというものではありません。

どんな人も悔い改めてこそ神の国に入ることができるのです。

そこで、神の言葉を、神のレベルで語る人が必要です。
その人こそ預言者であり、メッセンジャーです。
だから、預言者やメッセンジャーの言葉はきびしく、とげがあり裁きの言葉のように見えます。
それは、御言葉と御霊の剣だからです。
しかし、一見きびしい剣となる言葉こそ、神の愛です。
なぜならば、神は身を切っても魂を救おうとするほどの愛の深いお方だからです。

自分を見失ってしまったヨブを救い出すためには、エリフが必要でした。
彼の語る言葉は完璧です。彼の言葉の前にヨブは一言も答えることができなくなりました。
すなわち、ヨブは神の前における自分を知らされたのです。
エリフがヨブの気づかない神の前における問題を見させて、ヨブが神の前に立って神の御言葉を聞けるようにヨブの心を整えさせたのです。
人は自分の罪が本当にわかってこそ、神の前に出て行けるものだからです。

このように見ると、エリフは高慢な者でなく、へりくだった人物に見えてきます。
特にエリフの最後の言葉として、彼の主張の結論を書いています。

「全能者を見出すことはわたしたちにはできない。神は優れた力をもって治めておられる。憐れみ深い人を苦しめことはな

さらない。それゆえ、人は神を畏れ敬う。人の知恵は全て顧みるに値しない」（39章23・24節）

彼が神の前にへりくだっていることが右の言葉でわかります。神はエリフを備えてヨブを愛したとも言えます。

以上エリフについての見方を二つの違った角度から取り上げました。

聖書はそのときどき、その人が置かれた状況によって受け取り方が違ってくる場合があります。

前記した、ヨブを裁いてしまっているエリフ。

後記した、ヨブを愛して真実を語るエリフ。

実は、自分自身の中にいつも二人のエリフが宿っていることに気づきます。

あるときは真実を振りかざして相手を裁き、あるときは真実をもって相手を愛する自分です。

そしてその境目は、エリフの立場に立った自分自身が、本当に神を見ているか、本当は自分を見ているか、にかかわっていることもわかります。

たぶん、この理解は皆様にお任せします。

互いに、後記の、神に遣わされたエリフとして日々過ごしたいと祈ります。

神のお出まし

38章に行きます。

突如として、エリフが話している時に、

「主は嵐の中からヨブに答えて仰せになった。」（1節）

と、神様がここで介入してきます。

私はこれ、神様の愛だと思いました。

これだけ批判を受けているヨブです。もしそれを受け続けるなら、このあとヨブができることはたった一つ、自殺することしかなくなってしまいます。

このエリフのような言葉に責め続けられるならば、自殺と言いましたが、それが教会員であるならば、教会に来なくなるということですね。

それでしか自分を防衛できなくなりほしくないでしょうか。

それは霊の自殺ともいえます。

ところが、突如として、ここに神様が介入してくださいました。そして2節に、

「これは何者か。」

と言いましたが、この「何者か」とは、ヨブだけに言っているとは思えません。

エリフにも言っているし、もちろんヨブも含めています。

三人の友だちにも言っています。

「知識もないのに、言葉を重ねて 神の経緯を暗くするのは。」（2節）

と言って、「お前たちは色々なことを言って、正しいと思って

いるかもしれないけれども、それはむしろ神様の御心を暗くしていることなんだ。何を言うか一つ。」と言って、ここに非常な怒りをもって介入しました。

そして、神様は人間の知恵を確かめだします。

4節から、

「わたしが大地を据えたとき お前はどこにいたのか。」

(4節)

天地万物を創った時、お前はどこにいたのか、お前はそこにいたのか。誰がその天地の広がりを選んだのか。

深さを選んだのか。限界を選んだのか。

「お前は海の湧き出るところまで行き着いたのか。」

(16節)

この水がどれだけこのようにしてたまったのか知っているのか。

19節には、おまえは、光がどこから出たのか知っているのか。

22節には、お前は雪がどういうふうにして造られて、どういうふうにして来るのか知っているのか。

31節には、すばるといふ星のことを知っているのか。

39章1節には、岩場の山羊が子を産む時を知っているのか。

5節には、誰が野生のろばに自由を与えたのか。

13節には、駝鳥のことを、なぜ勢いよく羽ばたくのか知っているのか。

そして神は40章に入って、

「ヨブに答えて主は仰せになった。全能者と言い争うものよ、

引き下がるのか。神を責めたてる者よ、答えるがよい。」

(1 節)

神が尋ねたこれらの一つ一つのこと、だれも答えられる人がいないのは勿論のことです。

ところが、その時、ヨブだけが神に応答しました。

皆も答えていいはずですね。

しかし、答えたのはヨブだけでした。

「ヨブは主に答えて言った。わたしは軽々しくものを申しました。どうしてあなたに反論などできましょう。わたしはこの口に手を置きます。ひと語りましたが、もう主張いたしません。ふた言申しましたが、もう繰り返しません(4・5節)」

「もう主張しません」と言ってヨブは自分の無知を認めました。神様の一つ一つ「これは? これは? これは?」と質問された時、何も自分自身、本当は知らなかったことに気づいたのですね。

知らないにもかかわらず一人前のことを言っていたという自分自身の存在が、本当に恥ずかしくなりました。

そして、42章に行きましょう。

「ヨブは主に答えて言った。あなたは全能であり 御旨の成就を妨げることはできないと悟りました。『これは何者か。知識もないのに 神の経綸を隠そうとすると。』」

(1～3節)

これが一番ヨブの心に突き刺さった言葉でした。

「そのとおりです。わたしには理解できず、わたしの知識を超えた驚くべき御業をあげつらっておりました。」（3節）

これがヨブの結論ですね。

すなわち、神様と自分自身の姿を知ったのです。

神は全能であり、神はすべての知識を持っております。

しかし、自分は何も知らない存在なんだということを彼は知りました。

信仰というのは、これなんでしょうね。

神様と自分自身の立場を知ることなのです。

詩篇の記者の経験

さて、このヨブ記を理解する時に、非常に助けになる詩篇の一箇所があります。

それは詩篇の73篇です。73篇の詩篇の記者は、自分は一生懸命神様を礼拝していました。

けれども、ある時に自分に不幸がおそいかかって来ました。そして彼は、自分の足がすべる、要するに信仰をなくする寸前まで行きました。なぜかと言いますと、73篇3～8節に、

「神に逆らう者の安泰を見て わたしは驕る者をうらやんだ。死ぬまで彼らは苦しみを知らず、からだも肥えている。だれにもある労苦すら彼らにはない。だれもがかかる病も彼らには触れない。傲慢は首飾りとなり、不法は衣となって彼らを包む。目は脂肪の中から見まわし、心には悪たくみが溢れる。彼らは侮り、災いをもたらそうと定め、高く構え、暴力を振るおうと定める。」

要するに、この世の、悪を行って来ている人たちが、ものすごく栄えている。

それを見た時に、「ああ、神様って何だ。神様って本当にいるのか。神様がいるんだったら、彼らこそ罰せられるべきであって、信仰深く生きている人（わたし）がなぜ病気を持たなきゃいけないのか。なぜ苦しみに会わなきゃいけないのか。神様なんかいるはずがない。」と一瞬思ってしまったからでした。そして13節に、

「わたしは心を清く保ち 手を洗って潔白を示したが、むなしかった。」

自分が今まで神様の前に清く正しくあろうなんてこと自体が、むなしかったじゃないか、と言ったんです。

ところが、17節に、

「ついに、わたしは神の聖所を訪れ 彼らの行く末を見分けた」

ここは結論です。

色々なことがあったけれども、自分は神の聖所に行った時にわかった。色々なことが分かったのですと言いました。

これ、ヨブと似ていませんか、皆さん。彼は信仰深く歩んで来たけれども、ある時から世間を見てしまったのです。

この世というのをながめてしまったのです。

そうしたら彼の信仰はぐらついてしまった。

そして彼はすべりそうになった。自分自身は神様の前に清く正しく歩んで来たのに、それが何になるのかと思ってしまった。

ところがある時に彼は、もう一度聖所に行って、要するに神様の前に直接立ったんです。

その時に、見えるものが見えてきました。

そしたら高ぶっていた友人たち、もう彼らの姿なんて跡形もなくなってしまっています。

そして、神様を避け所とする者には、素晴らしい恵みがあることがわかりました。

それは、神様とつながっている者が幸せなんだ、と言うことが見えてきたわけです。

ヨブ記の方に帰ります。42章3節の途中に、

「わたしには理解できず、わたしの知識を超えた 驚くべき御業をあげつらっておりました。」

そして5～6節に、

「あなたのことを、耳にしてはおりました。しかし今、この目であなたを仰ぎ見ます。それゆえ、わたしは塵と灰の上に伏し、自分を退け、悔い改めます。」

ここに、「自分を退け」とあります。そうですね。この言葉にヨブが、神様と自分（人間）の姿がとてもよくわかったことを知ることができます。

その時に、見えてきたんです、ヨブには。

見えてきた結論があります。

それは何かと言うと、友人たちのために、心を注ぎだして祈れるヨブになっていたことです。

これこそ神様と直結した人間の姿であります。

皆さん、私たちは、人生に色々な苦しみがあります。

苦しみの意味は、いまだに私たちにはわかりませんし、また、私自身は特にヨブ記の聖書講解をやりたいという願いはありますが、ふさわしくないな、と心から思っています。というのは、自分自身がそのような災いや苦しみを経験していないからです。

ですからヨブ記を講解することに、恐れを持っておりました。

しかし、色々なことがあったとしても、神様の御言葉は私たちに語られております。

ヨブ記もまた、多くのことを私たちに語って下さいます。

私たちの人生の意味や、苦難の意味も、様々なことの意味も、頭で理解し、世間の知識をもってして理解しようと思ってもだめなんですね。

結論は一つです。本当にその人が神様の前に立った時に、神様はその人に意味を教えるということ。

他人は教えることはできません。

私は、格好のいいことは言っても教えることはできません。

それは、三人の友人たちになってしまい、さらに進んでエリフになってしまいます。

しかし、神様は必ず教えて下さるお方です。

それだけは、確信をもって言うことができます。

聖所に立った時に、色々なことが見えて来ます。

どうか、そのことをお勧めいたします。

二倍の祝福

最後に一言加えさせていただきます。

それは、42章にあるように、ヨブが友人たちのために祈った時に、以前の二倍の祝福を受けたことです。

それは、ヨブがより良い人になったから与えられた神様からの褒美でしょうか。

いいえ、神様はこの祝福をヨブに与えるために、この出来事を起こした、ということではないでしょうか。

さらに、神様は全ての人に、このときにヨブに与えたと同じ祝福を与えようと、

「天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました（エフェソ1章4節）」。

これが神が人間を創造した目的でした。

しかしこの祝福を用意したにもかかわらず、人の中にそれを受け取れない何ものかが存在し始めます。

ヨブの場合は、神の恵みに慢心して、心の片隅に自分が正しいから、との思いが芽生え始めていました。

それを神様は見逃しません。

それは、その心を裁くためではなく、心を正してより大きな恵みを与えるためです。

従って、ヨブ記の結論は人によって違うかもしれませんが、私の達した結論は、「神は愛だからです（Iヨハネ4章8節）」の言葉です。

だから、
「わが子よ、主の鍛錬を軽んじてはいけない。
主から懲らしめられても、力を落としてはいけない。
なぜなら、主は愛する者を鍛え、
子として受け入れる者を皆、鞭打たれるからである。」
ヘブライ人への手紙12章5・6節

さらにこのところにおける二倍の祝福について、このことは私たちの地上でのことを超えていると考えていいと思います。私たちの生涯は、肉体の死までではありません。それを超えて永遠の世界に伸びています。ですから、もしかしたら二倍の祝福を地上で受けた証しもあるかもしれませんが、この祝福のほとんどは「第三の天なる、神のパラダイス」で受け取るものだと考えます。

苦難に神の名によって耐えた人は幸いです。しかし、地上では皆の見える目には幸いな人生だったとは映らないでしょう。むしろ、クリスチャンだったのに、とため息を吐かれるかもわかりません。しかし、気にしないで下さい。神様の約束は完全です。神に期待して苦難に耐えた人には、ヨブと同じ二倍の祝福がまっています。ただし、主の御元に帰ってからです。主の次の約束を思い出してください。

「しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる」マタイ10章22節

お祈り

「天の神様、今日も恵みの時を有難うございました。
神様が、ヨブ記を通して私たちに語りかけて下さいましたことを心から感謝いたします。
私が理解できた部分はほんの一部でありますけれども、神様は意味のないことはなさいません。
ヨブをさらに祝福し、二倍の祝福を持ってヨブを回復しました。神様がヨブに干渉したのは、この祝福を与えるためであったことを信じますから、どうぞ主よ、私たちがそのことをはっきりと見る事ができますように導いて下さい。
イエス様のお名前を通してお祈り致します。 アーメン。」